

海外ボランティア活動報告書
平成23年9月5日～9月18日
ウガンダ共和国ルウェロ県ルウェロ地域
～エイズ孤児支援活動～

学習院大学文学部哲学科4年

園城蒨子

活動報告（全20頁）

学習院大学文学部哲学科4年
園城蒔子 07031029

1. 活動スケジュール

	午前	午後	夜
1日目	ルウェロへ移動 掃除	ミーティング	歓迎会パーティー
2日目	建設作業	学芸会準備	フリー
3日目	建設作業	学芸会準備	フリー
4日目	建設作業	エイズ勉強会	パーティー
5日目	建設作業	NACWOLA 訪問	フリー
6日目	フリー	中間評価	ミーティング
7日目	フリー	フリー	フリー
8日目	建設作業	フリー	文化交流会
9日目	建設作業	文化交流会② 家庭訪問	フリー
10日目	建設作業	文化交流準備	フリー
11日目	建設作業	学芸会準備	誕生日会
12日目	日本文化紹介	学芸会準備	フリー
13日目	学芸会本番	学芸会本番	フェアウェルパーティー
14日目	キャンプ最終評価 掃除	カンパラへ移動	

【活動期間】 2011年9月5日～18日（14日間）

【実施場所】 ウガンダ共和国ルウェロ県ルウェロ地域

バサッジャンソロ・メモリアル・トレーニングセンター

（以下、小学校のことはBMT Cと表記）

【活動メンバー】 日本人17人（うち女性13人）、ウガンダ人6人（同2人）、

*日本のNGO団体PLASから2名、現地NGO団体BACODAから複数名
が現地活動の進行を指揮して下さいました。

2. 活動内容

今回の活動は、大別すると以下のように分けることができます。

- A. 建設作業（小学校の教室作り）
- B. エイズ勉強会（ケーススタディー、ディスカッション）
- C. NACWOLA 訪問（NACWOLA=HIV・エイズ陽性者団体）
- D. 家庭訪問（HIV・エイズ陽性者ないし影響者の家庭を訪問）
- E. 日本文化紹介（折り紙、縄跳び、凧上げ、ラジオ体操）
- F. 学芸会出し物（ソーラン節、マルモダンス、二人羽織）

*分かりやすくするため、活動スケジュール欄で太字表示したものが該当事項です。

3. 活動内容詳細

A. 建設作業（教室作り）《活動は午前中に集中》



参考写真①：学校建設：この段階からスタート

建設方法

・主な資材＝レンガ（現地調達品）、セメント（手作り）

- ① まずは、教室を作るスペースの雑草抜き、不純物撤去などから始める。
- ② その後、レンガとセメントを合わせて下層部から順に横壁を積み重ねていく。
- ③ 屋根を付ける。
- ④ 床作り。柔らかい土を運び、上から木の棒で押して固めていく。
- ⑤ 微調整…壁と屋根の隙間を埋めたり、床強化など。

私たち（2011年9月メンバー）がお手伝い出来た事は、②の途中～④のほぼ完成まででした。②は、これまでのキャンプメンバーによってすでに70%程完成しており、レンガの積み重ね部分が高い位置で危険なため、2人の大工職人を中心に残りの壁レンガ作りが行われました。私たちはそのサポートとして、セメントをこねたり、大工さんへのレンガ渡しなどの作業をしました。

屋根部分は、特に職人技であり、私たちが貢献できたのは、床づくりです。学校敷地範囲内にある、土が突起している部分を削り、それを床土として使用しました。シャベルで削り、手押し砂利運びに入れて、教室まで土を運び、専用の土を押す木道具を使って土を固めていきました。

このとき、雑草などの不純物はなるべくのぞくことを心がけました。

作業体制

- ・土削り：2～3人
- ・土運び：2～3人
- ・土押し：4～5人
- ・何でも屋さん：1～2人
- ・水汲み・運び：2～3人

→体調を崩す人、食事作りグループ、などが抜けるため、12～16人体制で作業を行いました。また、炎天下の下での作業になるため、適宜水分補給休憩の声のかけ合い、疲れていそうな子がいれば休憩をうながす声のかけ合いをたえず心がけながら活動しました。

作業時間

- 8：45…作業開始（2時間）
- 10：45…休憩（15分）
- 11：00…作業開始（1時間30分）
- 12：30…作業終了

日中、暑さがピークになり、身体への影響も考え、午前中の比較的活動しやすい時間帯に集中して3時間半活動する、ということ話し合いにより決めました。



参考写真②：壁作り、大工職人さんを中心に

B. エイズ勉強会《9月8日(木) 14:30~16:00》

エイズに関する知識は、事前研修の際に全員が1時間ほどのレクチャーを受けており、基本的な内容は学習していました。現役小児科医師であるNGO団体PLASの理事の方から、パワーポイントを通して丁寧に説明を受講していました。

ウガンダでは、そのような基礎知識を踏まえてその病気が自分や自分の身の回りの人に起きたらどうするか?等といった知識理解ではなく、“その人たちに対してどの様に接していくのか”等といったエイズを身近なものとして想定する、という方法でエイズへの認識・理解を深めました。

具体的内容

1. ケーススタディ (1時間)

4~5人体制で4つのグループに分かれ、与えられたトピックについてお互いの意見を言い合う。その後、各グループで出た意見を発表し共有する。

・トピック…you' ve got married with your boyfriend/girlfriend and he/she disclosed his/her states of being HIV positive. What would you do?

(あなたは恋人と結婚し、その後相手がH I V感染者であることがわかりました。あなたはどうしますか?) *ディスカッションは全て英語で行われます。

・話し合いで出た内容 (私の班)

私の班は日本人女性3人、ウガンダの男性1人の4人で行われました。

4人共通意見=パートナーと別れず、支えていくという点でした。

パートナーを見捨てるのではなく、どうやってうまく付き合っていくか(支えていけるか)を模索する、というものでした。まずは一緒に病院に行き、今の具体的病状(初期なのか、深刻なのかなど)をお互いにしっかり理解することから始め、サポートしていくというものでした。

子作りに関して、養子をもらおうという意見、わからない、という意見が出ました。

(エイズ感染者との間にできた子どもが必ずしもエイズ感染して生まれてくるわけではなく、というのが悩みの種だと思われ)

*エイズ感染者から生まれる子どもが母子感染を受ける確率は3割

更に、私たちのグループではどのようにパートナーをサポートしていくか、という点について話し合いが膨らみました。以下6つの論点があがりました。

① 治療・療養

最も大切なことであり、欠かせないこと。相手に誠実であること。薬などの治療法があるから、ともに諦めず闘っていく。

② カウンセリング

人によっては、エイズに感染者であることのショック、また闘病の辛さによって自殺してしまう人もいる。そうさせないためにも、パートナーだけの支えではなく、しっかり専門のカウンセラーに通院して、適切な対応してもらおう。

③ パートナー以外とのセックスを一切やめる

エイズ感染を少しでも拡大させないために。もしするのであれば、必ずコンドームを使用すること。

④ 離婚せず、家族を作る

しかし、これについては**矛盾するような意見**も出ました。というのは、自分のパートナーに打ち明けられたら、離婚せず支えていくことを選択するが、逆に自分が感染者で、相手に話した時に相手が離婚を望んだら、それは構わない、というものでした。

また、先にもあったように、子作りに関しては危険度はあるものの、絶望するものではないという考えに落ち着きました。養子をとるなどの手段もあるためです。

⑤ 仕事に制限をかける

パートナーもそうであるが、自分の仕事に制限をかける。つまり、働きすぎない。

パートナーと一緒に過ごす時間を少しでも増やす。病状が重い場合、相手の命がどれだけ続かわからない。相手にとっては、パートナーが働きすぎるより、制限をかけて少しでも一緒に時間が長い方が、幸せだと考えるから。

しかし、治療・療養にはお金が必要であるし、仕事に制限をかけてその費用をまかなえるのかどうか、という問題点が残った。

⑥ 子どもたちにH I V・エイズについて教える。

子どもがある程度の年齢になった時点で、病状の恐ろしさ、きちんと予防すること、予防方法などをきちんと伝える。

以上は、私たちのグループで出たものですが、他の3グループも一貫して同じような意見があがっていました。

子作りに関しては別アイデアがあり、**精子バンク**を利用する、**代理出産**を頼むなどがあげられていました。

2. ディスカッション

基本体制は、日本人が持っているエイズに関する疑問をウガンダの人々に訪ねて答えてもらう、というものでした。

①ウガンダでは、エイズ感染者に対して差別はあるのか？

→ある。エイズ感染者の中には、口が赤くただれたり、肌を掻きむしる様な、感染者であると判別しやすい症状があり、そういった症状に達していた場合差別してしまうような事がある。しかし、ここ最近では少なくなっている。というのも、治療・療養状況がどんどん改善してきているから。

②エイズ撲滅するにはどうしたら良いと思うか。それにはエイズ感染の主要原因を抑えることが鍵だと考えられると思うが、それは何だと思っているか。

→問題は、エイズに感染しても貧困などの理由で治療を受けられず、感染が止まらないこと。治療にはお金が必要、でもそのお金がない。お金を稼ぐ仕事がない。

特に、郊外の村では治療薬のみならず、コンドーム自体が普及してない地域もある。(また識字能力の欠如により、使い方がわからない、どれがコンドームかわからないケースもある) 病院やカウンセリングセンターも遠くて、通うことが難しい。そういった場合、感染は広がる一方で、どうしたらいいかわからないのが現状。郊外の村には啓発のワークショップやセミナーの数をもっと増やす必要がある。

メディアによつての啓発活動も必要である。また、十分なカウンセラーがいないことも問題。エイズと気付かず他の病気だと誤解したままの人もあるから。結果的に、もっと啓発を促す政府政策やNGO団体が必要だと思う、という意見。地域によっては、大きなNGO団体もいるので、そういった団体の数の増加ないしは拡大化が必要。

③ウガンダでは、HIV陽性者判断のテストはどのような位置にあるのか。ありふれたものなのか、費用などどれくらいかかるのか。

→ウガンダでは、18歳から結婚できるため、その年齢の前後にテストする子が多い。テストは無料で受けれる。早い子で10代から受けるが、30歳代で受ける人も多い。ありふれてはいるが、ステータスを気にして受けようとしていない人も多い。(もし感染していることが周りに判明したら、現状のステータスを保つ事は難しい為)

④ウガンダの学校では、HIVについて勉強するのか。

→勉強する。小学校6～7年生(7年生=最上級生)に“sex education”(性教育)について学ぶカリキュラムがある。しかし、両親からも指導を受けるケースも多々。

⑤政府からの援助はあるのか。 →ないに等しい。

C. NACWOLA訪問《9月11日 15:30～17:00》

NACWOLAとは、ウガンダのルウェロ地域にあるエイズ陽性者団体の呼称です。私たちが滞在するBMTCから歩いて約1時間のところに、彼らのコミュニティ広場があり、私たちはそこを訪れ、エイズについての理解・交流を深めました。

タイムテーブル

- 15:00～ NACWOLAの人による歓迎歌&ダンス
- 15:20～ エイズ孤児に関する劇観賞
- 15:50～ エイズ感染者による経験談（男女各1名ずつ）
- 16:15～ 質疑応答
- 16:45～ NACWOLAの方々が作ったアクセサリーのお披露目（希望者は購入）
- 17:10 記念写真を撮り、閉会

各項目詳細

1. NACWOLAの人による歓迎歌&ダンス

まず、広場に入ると私たち一人一人の飲み物（1人1本コーラなどの炭酸飲料）が配られ、私たちがのどを潤している間に、歓迎ソング&ダンスが始まりました。

歌&ダンスは、10歳前後くらいの女の子2人、16歳くらいの女の子1人の3人によって行われました。音楽機器によるバックミュージックは全くなく、彼女たちの生の歌声だけが響きました。決して大きな歌声ではなく、か細くいものでしたが、本当に一生懸命に歌っており、とても心に響くものでした。ダンスはアフリカ独特のものといった感じで、日本では見られない新鮮な腰や足のステップなどをよく使った新鮮なダンスでした。

途中、歌の中に私たちキャンパーの名前を織り交ぜて歌ってくれて、驚きました。こんなに小さな子たちだけど、こうやって訪問に来る私たちをそうやって喜ばせようとしてくれたこと、それが凄く嬉しかったし、不安な気持ちもあったけど、歓迎してもらっているのかな、という思いになりました。歌を聴いていて、彼女たちのただ純粋に一生懸命歌っている姿に、目頭が熱くなってしまいました。

2. エイズ孤児に関する劇観賞

ストーリー

両親のいない4人のエイズ孤児の子たちが、苦難を乗り越え無事学校に行く、というお話でした。一番上のお姉さんがお母さんの役割を担って3人姉妹の面倒をみます。お金が

十分でないため、3姉妹は学校と道端で物を売るとい仕事を交代で行い、学校には毎日行けるわけではありませんでした。子どもたちは、学校に行けるときに精いっぱい勉強して周りの子たちに追いつこうとしますが、なかなか難しいものでした。

そこで、年長のお姉さんが学校の先生に「お金がないから無償で学校へ通わせてくれな
いか」と懇願しに行きます。先生は、「彼女たちは一生懸命勉強しているし、良いでしょう」
と許してくれます。そうして3人は毎日学校へ行けるようになり、それぞれ夢を持ち、1
人の女の子はパイロットになる！という大きな夢を抱え、学校へ通えるようになりました。

感想

劇は、全てガンダ語で行われるため、英語を話せるNACWOLAの方が節目で英語の
ナレーションをして下さって理解できました。

観劇後、ストーリーの意味を考えました。どうしてこういった展開だったのだろう、ど
ういったメッセージが含まれているのだろう、と。でも、うまく見つかりませんでした。

後から振り返って、意味などなかったのかもしれない、と思えてきました。こういった
展開にして、訪問してくる外国人にこういったメッセージを伝えよう！と、企画して演技
しているのではなく、彼らはただ、ありのままの現状を劇として、私たちの前で見せてく
れたのではないかと、思えてきたのです。つまり、変に深読みすることはなく、劇のメッ
セージがうまくつかめなかった、なんて悩む必要はないのではないかと、そんな結論に至り
ました。それも、彼ら・彼女たちから伝わってくる純粋さが起因していると感じます。

もしかしたら、私が最後に到達した考えは、違うかもしれない。きちんと、何か意味が
あるのかもしれない。でも、こうやって遠くから訪問してくる外国人に、エイズ孤児に関
しての劇をやってくれる、それだけでは嬉しいことじゃないか、最終的にはそんなふう
に思えるようになりました。

3. エイズ感染者による体験談

1人目 [男性、40歳前後]

エイズにかかる前に結核にかかっており、その治療をしていた。途中、病院でHIV陽
性であることがわかったときは、ショックだった。医者と相談して、まずは結核をしっか
り治してから、HIV・エイズへの治療に専念することにした。結核が無事完治し、3つ
の薬を使ってエイズ治療に専念することになった。

しかし、エイズ治療中にまた結核になり、辛かった。

いま、2度目の結核治療を終えて、体調は落ち着いてきた。

エイズがわかった時、怖いし、死にたい気持ちになった。だから、ギリギリまで病気の
ことを知らない方が、もっと楽しい人生を送っていたかもしれない。エイズだと知って、

自殺をしてしまう人もいます。でも、早めに分かって、治療することも大切なことだ。いまでは、町で芋などを売る仕事をして生計を立てている。生活は厳しいが、病状が落ち着いて安心している。

2人目 [女性、30歳代]

不慮の事故で夫を亡くして未亡人となったが、新しい夫を見つけた後、自分がエイズに感染していることがわかった。そのことに気付いた時、悪いことが連鎖して起きたため、アフリカによる魔女の仕業かと思った。新しい夫と出会い、子どもが出来た。生後間もなくして、病院に子どもをHIV陽性かどうかの診断テストを受けさせに行ったが、子どもの年齢が低くテストはできなかった。数年後、子どもと一緒に病院にテストに行ったら、HIV陽性であることがわかった。

更に数年後、夫との間に新生児が生まれた。幸いにもその子はHIV陽性でなかった。今10歳で元気に暮らしている。年長の子も、体調は万全ではないが今も生きている。

私と第一子は、確かにエイズに感染しているが、見ただけでわかる人はいない。学校や町で、多くの人に会うが、私たち親子を見ただけでエイズと分かる人はいない。エイズに感染したことは辛いですが、子どもたちが元気に暮らしていることが嬉しい。

経験談を聞いて

スピーカーのお二方は、非常にゆっくり、落ち着いて話してくれました。もちろん、ガンダ語で行われるため、ウガンダ人ワークキャンパーの1人が英語に通訳して、それをさらに日本人ワークキャンパーが日本語に通訳して、理解していく、という流れでした。私たちが椅子に座って聴いている中、スピーカーの方は、私たちの前で両足でしっかり立って、真剣に話をしてくれました。

一番感じたことは、一口にエイズと言っても、必ずしも死を予期しなければいけないものではないんだ、という事です。初期の段階で発見できれば、薬治療などで闘病していける病気なんだ、と本人たちを前に、ひしひしとそれを感じました。

何より、自分がエイズに感染しているということを、こうやって私たちの前で語ってくれる、そのことに感謝したい気持ち、尊重する気持ちでいっぱいでした。ウガンダでは、自分がHIV・エイズに感染への誤認識がまだまだ絶えず差別もある中で、きちんと表明して、このような団体に入って、私たち外国人に自分の経験談を話してくれる。

果たして、自分が逆の立場だったらそんなことが出来るだろうか？と疑問を投げかけたが、答えはいまも出ていません。

エイズにかかるなら死んだ方が良く、と思う程、判明した時はこんなにも絶望的になるんだ、ということもわかりました。想像しえることだけれど、本人の口から聞くことで、エイズの怖さをより近く感じた気がします。

2人目の女性が、第二子を連れてきていて、スピーチ後に、子どもを呼んで私たちに紹

介してくれました。照れ屋な子で、お母さんを大好きなのが伝わってきて、とても微笑ましい光景でした。H I V・エイズ感染者であっても、必ずしも希望を捨てる必要はない、幸せな家庭を作れる、そういったことを確かにお二方から学ぶことができた、本当に貴重な機会でした。

D. 家庭訪問《9月13日(火) 15:00～17:00》

6～7人体制で3グループに分かれ、それぞれ2家庭ずつHIV陽性者ないしエイズ感染者の方がいらっしゃる家庭を訪問することが出来ました。

ここルウェロにおいて、一般の方々に英語を流暢に話せる方は少ないため、通訳として学校の先生が1グループに1人ついてくださり、私たちの英語の質問をガンダ語へ通訳して頂き、解答を英語にして、インタビューを成し得ることが出来ました。

私たちのグループの質問内容

1. こうやって訪れる私たちのような人々をどのように感じますか。
2. 1日にどれくらいのお金を遣いますか。
3. 親戚や近所から何か支援を受けていますか。
4. TASO（アフリカにある大きなNGO団体）などから何か支援を受けていますか。
5. 薬療法以外に、何かこの土地特有な治療などは行っていますか。
6. 食生活でどんなことに気遣っていますか。
7. 学校でHIV・エイズ教育を受けたことはありますか。
8. 親もしくは子どもに、どんなことを伝えていきたいですか。
9. 家族構成を教えてください。
10. どんな治療をしていますか。
11. 親もしくは子どもたちはどんなサポートをしてくれますか。

解答

／	家庭A（既婚女性、40代前後）	家庭B（既婚女性、30代前後）
1	良いと思う。	とても良いと思う。
2	300円以下	850円位
3	いない。	いいえ。
4	いいえ。	無回答
5	いいえ。	病院に行って相談を聞いてもらうこと。
6	得がない。選択肢はない。	得がない。なるべく気遣うが、難しい。
7	いいえ。	無回答
8	感染を避けること。病気についてよく考えること。	病気を避けること、夜に出歩かないこと（強姦から身を守るため）
9	無解答	解答者、5人の子ども、母
10	無解答	3種の薬を服用している。
11	無回答	井戸の水くみや洗濯、農作業の手伝い

インタビュー感想

反省すべき点は、1件目の家庭訪問にあります。グループ内で、英語を使えるのが私 1人だったため、必然的に私がインタビューの盛り上がり左右する雰囲気がありました。しかし、最初の家庭では緊張しすぎて、学校の先生とも通訳具合が流暢にいかず、なんとなく暗い調子のまま終わってしまった気がしました。

また、予定していた質問だけでは少なく、その場で少し考えたりと、なんとなくしまりのない家庭訪問になった感触がありました。

そのため、2件目の家庭では仕切り直して、家に着いたら笑顔で「今日は私たちの訪問を受け入れて下さってどうもありがとうございます」と、握手するところから始めました。すると、あちら側にも私たちグループ側にも双方に良い雰囲気が流れた上でインタビューを始めることができ、笑顔のとぶ時間が多く終えることができました。

彼らを見て感じたことは、外見は全く普通の人と変わらない、ということです。それはつまり、口にしなければ差別を受けることはないと言えます。

(エイズの中には、口がただれたり、肌を掻きむしったりなどのわかりやすいサインが出ることがあると言われていたため)

また、どちらの家も子どもが多くおり、彼らが生活面で多く支えになっていることがわかりました。私たちが家に着いた途端、小さな家のどこからか小さな椅子ないし椅子になるものを子どもたちが運んで来てくれて、私たちを座らせてくれました。日本から来たこんな若者がインタビューする、なんてことをどう感じるんだろう・・・と、思っただけに、歓迎してくれているようで、安堵が生まれ、また感心しました。

インタビュー後、「私たちは差別しない」という気持ちを、どうにかして伝えたくて、代表で笑顔で両手いっぱい握手をして別れました。

本当に貴重な経験ができたと思っています。

E. 日本文化紹介《9月16日(金)9:00~11:30》

私たちは、以下4つの出し物を用意してきました。

- A. 凧上げ
- B. 折り紙
- C. ラジオ体操&縄跳び

これらを3つに分けて、BMT Cの子どもたち（小学校1～7年生約200人）にも縦割りでも3つに分かれてもらい、それぞれの日本文化を体験してもらいました。

活動結果

私は凧上げ担当でした。凧は、ビニール袋から作れる簡単な手作り凧を現地滞在中に8つ制作しておきました。1つの制作時間は15分位で、非常に簡単な凧です。



参考写真：通称ぐにやぐにや凧

学校の裏の空き地で、子どもたちの前で一度走って凧を飛ばすお手本を見せます。すると、子どもたちはすぐに吸収して遊び始めます。

途中、凧を占領する子が出始めたため、4つに整列させ、順番に遊ばれるようにしました。また、木にひっかかったりお互いの凧が絡み合ったりして凧が破損することが多発しましたが、その度に修繕して捨てたりすることはしませんでした。

感想

子どもたちが笑顔で凧上げをしている姿は、本当に可愛くて嬉しかったです。子どもたちの無邪気に目を奪われていました。簡単な凧だけど、本当に作ったかいがあ

ったと思います。

日本文化紹介となると、折り紙などが代表的ですが、この子たちはみんな元気で活発な子が多いので、凧上げを選んで正解だったと思います。

また、途中担当でないものの、折り紙グループに顔を出したところ、子どもたちの集中力に驚かされました。子どもたち自らで作るときもそうですが、私たち日本人が作っている姿をじーっと真剣に見る姿もかなり集中しており（普段はすごく賑やかなのに）、とても印象的でした。

縄跳びとラジオ体操は、担当メンバーに聞いたところ、意外にもラジオ体操にすぐになじんで元気いっぱい体操していたそうです。

予想していたよりずっと盛り上がった楽しい日本文化紹介となり、本当に良かったです。

F. 学芸会出し物《9月17日(土) 11:00~19:00》

学芸会では、BMT Cの子どもたちが歌や踊り、小さな劇などの出し物をします。発表者が学校の子たちですが、お客さんは、子どもたちの親だけでなく、町中からやってきます。(学芸会当日の朝、宣伝として町中を40分ほど行進するので、多くの人が来場してくれます)

そんな中、私たち日本人・ウガンダ人ワークキャンパーは、BMT C 小学校建設協力者として紹介され、出し物して、学芸会を盛り上げる機会を頂きました。

出し物は、【ソーラン節、マルモダンス(TVドラマで流行したダンス)、二人羽織】の3つに絞り、日本人担当者がダンスを覚え、現地入りしてからウガンダ人ワークキャンパーも一緒に隙間時間を見つけては練習をして、本番を迎えました。

- ・ソーラン節モデル画像

<http://www.youtube.com/watch?v=1bbBR-1TA3g&feature=related>

- ・マルモおきてダンスモデル画像

<http://www.youtube.com/watch?v=Go8iV6RJ1gw>

感想

私たちの出し物は、

- ・2人羽織…午前が一番最後
- ・ソーラン・マルモダンス…午後の最後から2番目のプログラムに、行われました。

2人羽織では、8名4組のペアを作り(ウガンダ人と日本人ペア)、パンとビスケットの早食い競争をしました。

観衆が子どもから大人まで笑っていて、嬉しかったです。大成功と言えます。

ソーラン節・マルモのおきてダンスも、大成功に終わりました。

ソーラン節は、毎年恒例ということもあって、子どもたちが一緒になって

「ソーラン、ソーラン」と叫んでくれて、得に盛り上がりました。

マルモのおきてダンスは、みんなで可愛く踊れて、良かったと思います。

ダンス発表が終わった瞬間、なにやら急に寂しくなりました。

2つのダンスをみんなが覚えるのは思っていた以上に大変で、多くの時間を費やしてきたものが、発表が終わった瞬間に、もうみんなで練習する必要がない、というのがむしろみんなで頑張るものを失ったようで、そんな感情になったのだと思います。でも、それはきっと頑張った証拠。発表後、ダンス担当者を胴上げしてお祝いしました

総括

今回のワークキャンプを臨むにあたって、私には1つの大きな狙いがありました。それは、H I V・エイズについての理解を深め、実際に彼らに会ってコミュニケーションすることで以って、自分の存在を役立てたい、というものでした。アフリカでは、いまだにエイズ感染が絶えなく、エイズに関しての誤った認識から差別が絶えないと言われていました。そういった状況下にある彼らに会いコミュニケーションをすることで、少しでもエイズに関して差別視していない人がいること、エイズに関して正しい知識を持っている人がいることを、知ってもらうことで貢献したい、という思いが強くなりました。

たしかに、一見、学校建設などの肉体労働で汗水流して自分の体を使う方が、サポートをしている、ボランティアをしている意識が強く感じられるようにも思えますが、私は、肉体労働のボランティアには限界があることを、数年前に参加したワークキャンプで痛いほどに思い知りました。

というのは、肉体労働作業には、力のみならず技術面が必要不可欠であり、そういったものは素人の私たちには限界があるのです。そして、肉体面で言えば、現地の方が私たちより遥かに強固な力をもっており、私たち先進国からくる様な者の力は、むしろ作業効率を悪くしているのではないかと、その衝撃を受けたのです。

当時、現地に行けさえすれば彼らを助けられると思っていた自分がおり、自己の力と現地で出来ることと一致性をきちんと理解していなかった為、相当のショックを受けましたが、それが現実なのであり、その後に生きる大変良い経験になったと捉えています。

さて、先に述べた狙いを達成できたのかどうか、答えはイエスと言えます。日本で最初にH I V・エイズについて学んだときは、正直双方の違いが何かもわかっていませんでした。(H I Vはウイルスで、人間の免疫を低下させる。それがエイズという病気症状につながる)また、エイズには4大感染源(同姓間における性的接触、異性間における性的接触、麻薬などの注射の打ちまわし、母子感染)がありますが、最大原因が同姓間における性的接触だったことなどは驚きでした。

「エイズ孤児」という言葉も、このワークキャンプ参加で初めて知りました。エイズ孤児とは、両親もしくは片親をH I Vないしエイズによってなくした18歳未満の子どもを指します。つまり、必ずしもH I Vに感染しているわけではありません。しかし、アフリカではいまだに差別が止まらないと言われていました。

アフリカへ出発する前、こういったエイズ感染者、エイズ孤児の子たちとたくさん触れ合って、差別視していない人がいるということを、遠い外国から来た人たちは、あなたたちのことを理解している、ご認識していない、ということを経験して伝えたい、と強く決めました。

現地の学校に着いたとき、子どもたちが元気いっぱい私たちにキャンパーを迎えてく

れて、嬉しくて、私も一緒になって笑顔で彼らと遊んでいました。建設作業の休憩中や、作業終了後、一緒に走り回ったり、手遊びをして笑顔の絶えない時間を過ごしました。そのことが、彼らにとってどれだけ貢献できているかわかりません。でも、ここに来ていなかったら、“一緒に遊ぶ”なんて凄く単純なことだけれど、来ていなかったら、そんな単純なことさえ出来ていなかったでしょう。だから、一緒の彼ら子どもたちと一緒に時間を共有できたこと、そこに意味があるのだと、解釈しています。

エイズ勉強会のケーススタディ、ディスカッションでは、積極的に発言をして、日本ではなかなか出来得ない経験ができたと思っています。

“自分の結婚相手が、結婚後にH I V陽性者であると知った後、どうするか、”というテーマは、エイズが蔓延しているウガンダの場で、そこに住むウガンダ人も一緒に考える、ということは、非常に重いものでした。

でも、だからこそ心の底から真剣になって考えられたし、お互いの意見を尊重し合うことができたと感じています。仮に、場所が日本であったら、現実味から少し離れてしまって、あそこまで深く自分の身に置き換えて考えられなかったのではないかと、思います。

ディスカッションでは、ワークキャンパーに疑問点を聞いたことが本当に良かったです。正直、質問内容にはかなり気をかけたし勇気のいることでした。相手の心を踏みにじるような質問はしてはいけなけれど、彼らにしかわからない気持ちに近づきたい、理解したいという思いが強くありました。実際には、何のいさかいが起こることもなく終えることが出来ました。

そして、NACWOLA（ナクワラ）訪問。ナクワラは、現地にあるエイズ陽性者団体です。そこを訪れた時、その団体者の中の子どもたち3人が5、6曲ほどの歌とダンスでもって歓迎してくれたとき、泣きそうになってしまいました。楽器も何もない、ただひっそりと彼らの歌声だけが敷地内に広がり、歌声が凄く心に染みわたりました。こんな綺麗な歌声を持つ子たちが、どうして思い病気に苦しまなければいけないんだろうと感じたし、悔しいような腹立たしいような気持ちになりました。最後に、彼らが作ったアクセサリーのお披露目があり、いくつか買ったときの彼らの喜んだ顔が忘れられません。

そして、家庭訪問。これは、私が今回一番望んでいたものでした。H I V・エイズの影響者のいる家庭を訪れて、彼らに質問をする。こんなことぜったい日本では出来ないことだと思うし、受け入れてくれた学校・家庭に深く感謝の気持ちを述べたいです。

今回のワークキャンプを知る前は、H I V・エイズに関する知識なんてほぼゼロでした。それが参加を決めてから、レクチャーを受けて10のうち2、3の知識が蓄えられ、ワークキャンプ参加後、7、8ぐらいになったんじゃないかと感じています。

今まで、エイズなんて自分に全く関係ないから気にも留めていなかったし、考える必要なんてないと思っていました。でも、人ごとだと思っていたことが、今では大好きな

ウガンダのルウェロという土地で今もエイズが止まない、という現実が非常にもどかしくなったり、決して人ごとに思えなくなったのです。これは、自分にとって本当に大きな変化だと思います。

自分がお世話になった土地で、お世話になった人々が苦しんでいるのは、耐えられません。日本にいるから、遠いから関係ないではなく、遠くても、遠いなりに出来ることがあると思います。今の私に出来ること、それはこれから今回のワークキャンプで学んだことを、1人でも多くの人に伝えることだと思っています。家族に、友だちに。そして、エイズ孤児支援NGO・PLASを通して、ワークショップなどのイベントに参加して、私の知らない人たちにも、どんどん伝えていきたい、それが大切なことだと思っています。募金などの支援もそうだし、そういった人たちがワークキャンプに参加して、少しでも何か感じとって帰ってきてくれたら、きつときつと、アフリカのエイズ蔓延の歯止めになると言えるし、そうしていくことが、今の目標です。

10月1, 2日に日比谷公園でグローバルフェスタがあり、そこでPLASはブースを出して、エイズ孤児支援についての情報を広げます。私もそこに手伝いに行って、さっそく、自分の気持ちを伝えていきます。

終わりに

つたない文章で、加えてものすごく長文になってしまいましたが、本当にここまで読んでくださってありがとうございました。深くお礼申し上げたいと思います。

また、写真掲載を重ねてもっと視覚的にも伝えたかったのですが、カメラの読み取りがうまくいかず、実現できなかったことお詫び申し上げます。

もし、写真がうまく読みとれたら、興味のある方はおっしゃって下さいましたらぜひ写真お持ちしますので、いつでもお知らせください。

厚かましくて申し訳ありませんが、その際はぜひ、お声おかけください。

連絡先) onoffps@yahoo.co.jp 080-4337-3339

哲学科4年 園城路子